

まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

VOL 72



アングル

春近しの由布院から……………玉の湯専務取締役／桑野 和泉 …… 1

(特集)

『まちのにぎわい』

ミズ・ネットワーク 女性たちの取り組み……………松 阪 市／齋田 衣保 …… 2

「暮らしにやさしい」まちづくりの実践……………五十崎町／北地 信彦 …… 4

伊予市灘町における賑わいづくり……………伊 予 市／玉井 彰 …… 6

Heart to Heart ………………八幡浜市／菊池 良久 …… 8

まちの賑わい……………今 治 市／ト部 秀彦 …… 10

キラリ光るまち

「まちづくりはみんなで力をあわせよう」

NPO 法人新町川を守る会／中村 英雄 …… 12

連載 引き算型まちづくりの事始め (三)

内 子 町／岡田 文淑 …… 14

論談—まちづくり—

まちづくりの方法論……………日本・環境文化研究所／河原 利和 …… 16

トークナウ

近代化遺産等総合調査の一次調査を終えて……………元調査員／越智 恵理 …… 18

あいあいキャンプ……………はーと・ねっと・くらぶ／田中 啓文 …… 19

MY TOWN うおっちゃんぐ 歩き目デス&足ラテス

近代化遺産シリーズ「学校建築②」……………岡崎 直司 …… 20

研究員卒業レポート

随想～いい地域に向って～……………森田 浩二 …… 22

自分づくりはまだまだこれから……………三好 誠子 …… 24

平成13年度地域づくりリーダー育成研修会報告……………26

Information まちセンからのお知らせ……………29

特集

「まちの賑わい」

どんな小さな町や村にも、賑わう場所はあったはず。それは広場であったり、祭りの鎮守の森であったり、海辺なら魚を水揚げする市場であったりする。しかし「まちの賑わい」と聞いてまず思い浮かべるのは、まちなかの商店街ではないだろうか。そして、次に連想するのは、そういえば最近商店街も寂しくなったなあ、だろうか。以前は様々な人が歩いていたし、いろんな匂いがしていた。音がしていた。元気があった。

確かに車社会になって、大型店はどこど郊区に進出し、車の止められないまちなかは敬遠されていった。そこへ経済不況が追い討ちをかけていった。まちなかから離れ、人はどんどん外へ出て行くようになった。

そんな中、もう一度まちに賑わいをと頑張っている人たちがいる。もう一度、まちなかに人を呼び戻そう、賑やかな界隈を作ろう、と頑張っている人達だ。今号は、様々な立場でまちに賑わいを取り戻そうと活動しているグループを取り上げた。

(編集子 三好)

表紙の言葉

大病の人に「桜の花を見るまでは」とか、「家に帰って花見をしたい」と命を他ならぬ桜の花に掛ける程まで、愛され心に残り、人生の節目も桜に形容される。

日本列島がピンクに染まる。京都は特に桜がよく似合う。しかし桜の美しい時季に合わせるのが一瞬で難しい。

千年を越える京都の国宝、九重枝垂桜の下に立った時、蓄みが開花するパワー、空気の振動を感じた。人の心を癒している事も。

京都 常照皇寺
国宝九重枝垂桜

柳原 あや子



春近しの由布院から

由布院 玉の湯
専務取締役 桑野 和泉



この季節、早起きをして散歩に出かけたくなる。春近しの山里は美しい。まだ霜がおりる寒さながら、穏やかな光り、匂いたつ梅や桃の花に、可憐な草花。シンフォニーを聴いているような鳥の囀り。行き交う人の「おはようございます」の声もいつもより気持ち華やいで聞こえる。昼間の溢れんばかりの人や車とは別世界の落ちついた佇まい。どんな時代になろうとも変えてはいけないものが見えてくる。

千九百二十四年（大正十三年）に由布院で当時日本の最高権威であった林学博士、日比谷公園、明治神宮を設計した本多静六先生が、「由布院温泉発展策」と題し講演をしてくだ

さっている。ここで話されていることは「健康第一の文化生活にふさわしい町をつくりなさい」から始まり、「町の中に公園をつくるのではなく、町全体を公園にしなさい」「町の周辺に駐車場をつくり、住民や旅人には、町の中を落ちついて安全に歩いてもらいなさい」「建物を木で隠しなさい」。また保養温泉地を従来の村落と切り離しつくるのではなく、暮らしに繋げなさいと話されている。改めて私達は繕ひもといていっているが、八十年近く前にこの地で、このような論議がなされていた事は、驚きであり、同時に誇りと勇気を与えてくれている。

ここ数年、私達の悩みである景観の乱れや交通問題、地域内流通も、それを一緒に考える仲間がいれば、すぐに解決できることではないが、大丈夫と思っている。どの時代も、大きな波は押し寄せてくる。社会の速度に流されるのではなく、自分達の町の速度をもちたい。なにもしないとにも変わらないのではなく、失われてしまう現実の中、しっかりと向いあっていたいと思う。

考えると私の子ども時代の記憶は、美しい農村風景と大人達の闘う姿だ。カッコいいと

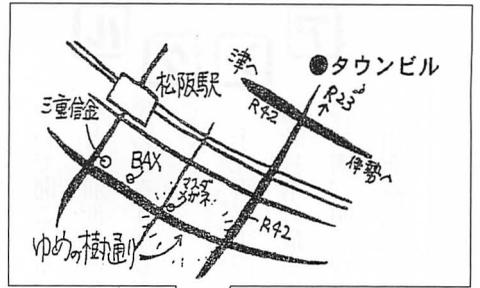
思った。どんな言葉よりも、その姿勢は、説得力があった。大人を見て子どもは育つ。同時に、志しのある町に人は惹かれるのではないかと思う。

由布院観光の柱は地域づくりである。「観光」とは本来地域を元気にするものであり、出会いと結びの産業であり、そして人を幸せにするとは私は思っている。「いつの日か大切な人もう一度来たい町」と言われるとなにより嬉しい。ある時は励まし、ある時は、やさしく抱きしめられるような町でありたいと思う日々である。



玉の湯風景

ミズ・ネットワーク 女性たちの取り組み



三重県松阪市
ミズネットワーク松坂代表

齋田 衣保



松阪は、伊勢平野のほぼ中央に位置し、松阪牛で知られている人口十二万の街です。江戸時代には、参宮街道・熊野街道・和歌山街道が合流する交通の要でもあり、伊勢神宮へおかげ参りする人の宿場町。松阪木綿で江戸に進出した松阪商人が活躍し、三井(現三越百貨店)、国分、長谷川など多くの豪商を生む商人町として栄えてきました。

ミズ・ネットワークの設立

現在では、松阪市中心商店街近代化事業により、平成八年、街は整備されたものの、郊外型大型店の進出などで、ご自分にもれず商店街は商人町というには寂しい限りです。そんな中で、商店街のおかみさん達が、街の垣根を越えてなんとか街の賑わいをと、平成十一年九月からミズネットワーク松阪として動き出しました。

私はその前、中心商店街の外れで『ゆめの樹通り花梨の会』というおかみさん会を立ち上げ、四年間なんとか街に賑わいをと、朝市をしたり、広報紙「花和羅版」を年六回発行したりとがんばってきましたが、一商店街だけでは限界があることを感じ、他の街の女性有志にも声をかけたところ思いを一つにする事ができ、

現在に至っています。

私達には本業の商いがあるわけですが、従来型の売り出しや抽選会などのような催しでは一過性に終わってしまい、末は街として存続しなくなるのではないかと危惧しています。そこに住んでいる者には、歴史や文化を継承していく事が大切であり、次世代の人たちにうまく松阪のよさを伝えていき、街を好きになってもらう事が街の賑わいをもたらすと思っています。

本居宣長没後二百年をきっかけに

松阪は、医者であり、古事記の注釈書「古事記伝」を完成させた国学者、本居宣長も生んでいます。平成十三年が、没後二百年にあたる事から、本居宣長を全国発信しようと、三重県・松阪市・市民の三者協働事業「宣長さん二百年」が実施される事となり、我々ミズネットワーク松阪の思いと重なる所もあって、一緒に参画し、参宮街道・和歌山街道を使って、街に賑わいをと『鈴の音市』を行いました。

『鈴の音市』の名は、宣長が鈴の愛好家でもあり、学問の疲れを鈴の音で癒したとも伝えられている事に由来しています。四月から十月にかけて五回にわたり、

まちの賑わい

子どもからお年寄りまでがいろいろな活躍できる場面を演出し、楽しさを共有して心なごむ趣のある場面を提供し、参加した人が満足感を味わって帰っていただけるように演出する事を心がけて行いました。人が人を呼び、輪が広がり、賑わっていききました。

鈴の音市

鈴の音市一回目は、宣長の事柄を、街なかのゆかりの地七十五箇所パネルにして掲示。街中がぱびりおん状態。

二回目は街中の文化祭と銘打って、中学生・高校生の発表の場。誰でも参加できる体験講座と幅広く関わってもらいました。



脱衣所もコンサート会場に変身

三回目は、子ども達に昔懐かしい縁日を演出して楽しんでもらったり、私の住んでいる地域で好きな所、残したい所の写真展。

四回目は、由緒あるお寺の縁日が年々寂しくなっているというので、境内で高校生の書・絵の展示。校区内の小学校全児童に、ほのぼののあかり（ランプシェード）の作り方講習会を事前に済ませ、仕上げた作品を当日参道に灯し、そのあかりの中でバイオリン・フルートのコンサート。

五回目は、築八十年たった銭湯（現在休業中）の脱衣場や浴場が、レトロコンサートの会場に変身。街角では手作り作家のクラフト市を、たくさんの人とかか



鈴のまち・はじける文化祭

わりながら、みんな楽しんでむことができました。

全体として、女性ならではの情報発信、ネットワークの良さと、一味利かせたエッセンスで風情あるものとなり、参加者数四千人、スタッフ数二百人と予想以上の盛大なものとなりました。

住み続けたいくなる街を目指して

山登りのように、登って行く過程はつらい事もたくさんあります。特に女性が活動するという事は、家事・育児・介護、そして本業の商いと女性の負担が大きく、家族や周りの人の理解と、並々ならぬ努力が必要です。

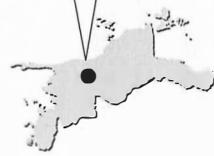
だからこそ、成し遂げたときの達成感と充実感が、次へのエネルギーとなっています。継続する事により、街の賑わいも本物になっていくと信じていますので、投げ出すわけにもいかないのです。

松阪らしく、ここに来なければ味わえない街、住み続けたいくなる街をめざし、すぐに結果の出るものではありませんが、日々そういう気持ちで街づくりにかわり、刻々と時を刻み、いつまでも街として残っていけるよう頑張っているところです。

「暮らしにやさしい」 まちづくりの実践



五十崎町
天神商店街 北地酒店
北地 信彦



五十崎は、奥伊予の玄関口、内子町の隣に位置する人口六千人ほどの小さな町。昔は鉾山もあり、農業や手漉き和紙といった産業の活発なまちだったそうですが、今となっては遠い過去の話。そんな中、商店街を分断する新県道建設の対応に天神商店街が結成されてはや十年が経ちました。

天神商店街の取り組み

最初に取り組んだのは、担い手がいなくなり消えていった祭りの復活。まず春先に行なわれた糞笠市（みのかさいち）。これは、近郷の農家が種ものや苗もの、鍬や鎌といった農耕具を補修したり、買い揃えるために開かれていた青空市です。次に八月七日の七夕祭り。内子町のそれとは趣が異なりますが、昔からあった素朴な七夕祭りを復活させ、商店街を飾ろうと始めました。

十二月の第一日曜日に開かれるのが、収穫祭。これは、秋の牛市を復活させたもの。昔は小田川の原っぱ（通称だば）で牛のセリ市が開かれ、近郊の人が集まり賑わっていた祭りです。

地域通貨「五十崎榎シール」

そして、現在取り組んでいることに、



七夕祭りの商店街風景

地域通貨の「五十崎榎シール」があります。これは、商店街活性化のためにシールカードを使って何かできないかという、商店会の発想から起こったものです。お年寄りの方百人を対象に行った聞き取り調査から、皆様にちよっとした困りごとや将来への不安を抱えて暮らしている実態がうかがえました。

こうした地域内の要望と商店街機能の間に経済を介在させ、システム化したのが「五十崎榎シール」です。

細かい説明は省きますが、私たちが考えるのは、ボランティアや奉仕活動も、最低限の経済が伴わないと長続きしないということ。そうした無償の活動を否定するわけではなく、地域の中に多種多様

まちの賑わい

なシステムがあり、消費者が必要に応じて自由に選択できることが大切と考えています。

世の中には、行政が組織する人材センターというものもあるようですが、私達のまちでは行政に頼らず、商店主がそれぞれの仕事からはみ出した部分、もしくは延長上にあるサービスをその店の顧客だけではなく、地域の人が広く利用でき、また誰もが自由に参加できるようにシステム化したものです。

実際、普段お年寄りが困っていることの多くは、ほんのちよっとした些細なことのようなのです。これまでに私たちが請け合ったサービスを紹介すると、雨どいの掃除や簡単な修繕、ボタン付けやお裁縫、



収穫祭

毛筆での代書や刃物研ぎ、生け垣の剪定やおもちやの修理、お正月のペット（犬と猫）一時預かりもありました。

商店（人）の存在理由

商店街の活性化を語るとき、避けて通れないのが「商店の存在理由」。

食えるためなら、勤めに出た方が気が楽。利益目的ならば、人口の多い立地が好ましい。何のために商店を営む意味があるのか。事業を営むならば、地域の役に立たなければ存在する意味がありません。そこを違え、地域消費者の支持を失った店や必要のなくなった店は、自然と淘汰されていきます。

原点に立ち返り、地域になくしてはならない店（人）、必要とされる店（人）になれるかどうかには、商店街活性化のカギがあるでしょう。店も地域も、結局は人の生き方にあると考えます。

住民が主役のまちづくり

私が学生の頃、この五十崎では小田川の河川改修に立ち向かい、「石一個運動」を展開して近自然河川工法を導入するきっかけとなった住民運動がありました。商店会を中心とした活動にも「自分の村のことは、自分らが決める」という、住

民自治の精神があるのでしよう。

天神商店会結成のきっかけとなった新県道は、最も危険な道として、皮肉にも当店のすぐ近くに横たわっています。一度建設された道路は、人の交流や地域の文化を断ち切るだけでなく、幾世代にも渡って地域住民の生活環境に大きな負荷を与え続けていきます。

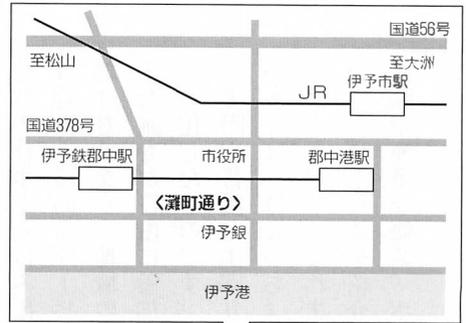
確かに、インフラの整備は必要であり、きわめて重要な課題。だからこそ、行政が単に事業として道路を新設するのではなく、そこで生計を立てる住民が、将来の利益や損失を考慮に入れた全体計画について声を上げることが大切なのではないでしょうか。

市町村の合併問題も、詰まるところ住民自身がまちづくりを考えることにあるのでしよう。今後も私たちは、「石一個運動」の精神を受け継ぎ、「暮らしにやさしい」まちづくりに向けて活動していきたいと思えます。



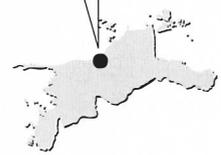
収穫祭で大盛況となった漬けものコンテスト

伊予市灘町における 賑わいづくり



伊予市
第3セクター(株)まちづくり郡中取締役
伊予市商業協同組合まちづくり委員長

玉井 彰



盛夏には、伝統ある住吉祭りがあり、一年で最高の賑わいになります。住吉祭りの伊予踊りと花火は、伊予市の夏の真つ盛りを巧みに演出します。灘町の商店街では、かつてこの祭りに合わせて「つ

祭りでの賑わいづくり

伊予市灘町の商店街は、大型店の進出、国道の整備による松山市の吸引力の増大、ロードサイド店の展開等により、地域での中心性を失ってきました。商店数も減少の一途をたどり、歯抜け状態になりつつあります。我が商店街では、「空き店舗問題」より「仕舞た屋問題」の方が深刻です。商店が廃業して住宅地化が進行すると、商業地であるとの意識も希薄になり、残された商店の世代交代も難しい状態になってきます。

そのような状況を抱えながらも、伊予市の商業者はしぶとく生き残りの戦略を描き、街の賑わいづくりに取り組んできました。二十年近く続いている「ふれあい土曜夜市」は、六月の第一・第二・第三土曜日に開催され、伊予市周辺の人々にとって夏の到来を告げる風物詩として親しまれています。日頃人影のまばらな商店街に一人から二人の通行者が出るのです。

伊予市灘町の商店街は、大型店の進出、国道の整備による松山市の吸引力の増大、ロードサイド店の展開等により、地域での中心性を失ってきました。商店数も減少の一途をたどり、歯抜け状態になりつつあります。我が商店街では、「空き店舗問題」より「仕舞た屋問題」の方が深刻です。商店が廃業して住宅地化が進行すると、商業地であるとの意識も希薄になり、残された商店の世代交代も難しい状態になってきます。

寿楽市の始まり

「くりもの」をする習慣がありました。各商店が思い思いに手作りの模型や飾りを作ることで来街者を楽しませるとともに、自分たちも楽しむものでした。平成に入る頃、その習慣が途切れました。商店街に余裕がなくなってきたのです。近年、これを復活させようではないかという声が出始め、平成十二年から「つくりもの」が復活しました。これを採点し、表彰します。デイケアに通う高齢者がつくりものにチャレンジして高得点を取るなど、思わぬ展開も見られました。

平成十二年の七月から、第三土曜日の昼間に「寿楽市」が開催されています。



第1回寿楽市祭り

まちの賑わい

灘町に出来た空き地を地権者から借り受け、「街なかにぎわい広場」と命名して、普段は子供の遊び場として利用してもらい、イベントもできる場所として活用しています。県の補助を得て開かれた勉強会で広場の活用方法を検討した結果、「市」を開催して街の賑わいづくりをする方向で意見がまとまりました。次に、名称をどうするかが問題になりました。昭和四十年頃まで灘町に芝居小屋がありました。内子座の一・五倍の大きさだったと言われる「寿楽座」です。寿楽座を復興したいという街の人々の夢を託し、「寿楽市」と命名しました。

テントをずらりと並べ、地元の野菜や果物、海産物、加工食品を取りそろえ、また、各種の店舗が出店して賑わいを演出します。芸術の重要性を強調し、「街なか芸術文化」も行われています。

寿楽市は、今年三月で三十三回目の開催になります。平成十三年十月には、県の補助事業として「第一回寿楽市祭り」を開催し、県内から朝倉村、小田町、城川町の方々の参加を得、また、出店者によりフリーマーケットも行われました。昼間としては近年にない賑わいとなりました。ある方が「昔の商店街はこうだった」と語ったのが印象的でした。

女性を主役に…五色姫復活祭

平成元年より開催されている女性の祭典五色姫復活祭は、今年の三月で第十四回となります。平家の五人のお姫様にまつわる伝承を基に、商店街を舞台に歴史絵巻を展開します。五色姫のパレード、呼び物の女性御輿かきくらべ等盛りだくさんの行事で、愛媛に春が到来したことを告げるイベントに成長しました。数百人の市民が主体的に参加する、参加型のイベントです。主役となる五色姫は、まちづくりのシンボルとして各種の行事に参加しています。



五色姫復活祭
五色姫が舟に乗ってパレード
前列は小学生五色姫と役員

新たな街の賑わいづくりへ

伊予市の商業者は、賑わいづくりを進めるとともに、商店街の活性化を越えて「まちづくり」への取り組みをすすめて

きました。商品券発行を基幹事業とする伊予市商業協同組合は、平成五年以降本格的なまちづくりを目指して勉強会を行い、江戸時代の初期に民間主導で創られたという街の成り立ちの特色、港を中心に商工業で栄えた歴史とその名残をとどめる町家等の地域資源を活かしたまちづくりに取り組みむことを決め、「海とロマンのまち伊予市」をキャッチフレーズとしてまちづくりを推進してきました。

平成十年の中心市街地活性化法の制定は、まちづくりの活動に転機をもたらしました。伊予商工会議所の提言を受け、伊予市が「いよいよ郡中街物語が始まる…海と歴史の浪漫を感じる暮らしやすいまちづくり」をキャッチフレーズとして「伊予市中心市街地活性化基本計画」を策定（平成十二年）。これを基に、TMO構想が作成され、平成十三年九月に第三セクター株式会社『まちづくり郡中』を設立。同月伊予市よりTMOに認定されました。官民上げての態勢が整い、魅力ある中心市街地づくりへの取り組みがスタートしました。目下、「街の顔」となる「街の交流拠点」の実現を目指して「TMO計画」の作成に取り組んでいます。「賑わいづくり」の本格的展開となります。

Heart to Heart

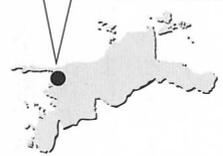
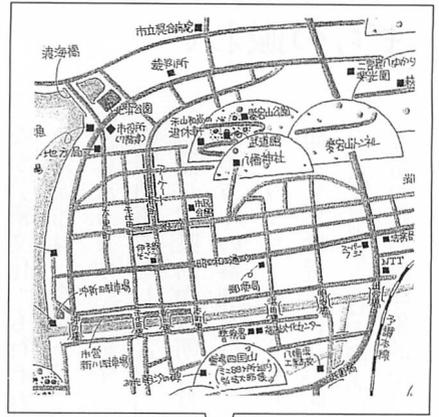
—高校生がリードする商店街活性化—



後列右端が菊池先生

八幡浜市
八幡浜高等学校商業研究部

顧問 菊池 良久



AKIND (アキンド) の誕生

八幡浜高等学校「商業研究部」は、以前から地域経済について研究調査を行ってききましたが、「地元商店街に活気を取り戻そう。高校生の自分たちにできることは」と「商店街活性化」のテーマを掲げ実践を始めました。

「商店街活性化」の具体的な活動として平成十二年五月、商店街の空店舗を借りして、部員たちが経営する商店を開店させました。「商人」、「飽きんぞ」、「AKIND (親切な)」の言葉から、「AKIND (アキンド)」と名づけました。以後、特産品の販売、地元業者から商品(野菜・花・果物・海産物・お菓子・玩具など)を仕入れての販売、商店からの委託販売、近隣農業高校から仕入れた商品(野菜・花・食品加工品など)の販売や押し花教室、コーラス部合唱会、手話教室などの催し物をこの二年間で十二回実施してきました。

なお、平成十三年七月には、高齢者の方々とともに土曜夜市に「AKIND」を開店させました。市内の老人クラブ連合会や市総合福祉文化センターの方々のご協力を得ての開店でしたが、高齢者の方々の手作りの品や持寄品など店舗いっ



AKIND 開店風景

商店街、商店連合会との連携

一 「町づくりサミット」の開催

ばいの商品を提供していただきました。当日は、高齢者の方々と共同で準備や販売を行うとともに、老人クラブのお仲間やご家族の方など多数の方に来店していただき、多くの方々とコミュニケーションを楽しむことができました。

各商店街や商店連合会と商業研究部の意見交換を行うことで、相互理解を深め、商店街の活性化に向けての協力体制を作ること为目标に開催しています。年間三回の開催を通して、商店連合会や各商店街の役員・青年部の方々と意見交換や

まちの賑わい

懇談ができ、相互理解と協力体制が図られるようになってきました。



まちづくりサミット

この中から、商店街に流れるBGMの選曲や音量、商店街クリーン作戦などの意見が出され実施されました。また、このサミットを通して、商店連合会から商業研究部の活動に奨励金をいただくことになり実現しました。この奨励金はMAPやパンフレットなどの印刷費用として活用させていただきました。

二 広報活動

まず、市内四商店街の一品一店を取材させていただき、写真と販売商品やPRを掲載した「商店街を歩こうBOOK」を作成し、多くの方に活用していただいています。

次に、各商店街の紹介や八日市・土曜

夜市などの催し物のお知らせ、「GOOD SHOP」などお薦め店や新しく開店した店の紹介記事、商業研究部の活動報告などの記事を掲載した「商店街広報」や「月刊AKIND」を作成。巻末にはご協力いただける商店のクーポン券を掲載し、商店との連携についても工夫を凝らしています。各商店に置かせていただいたり、街頭で市民の方に配布し読んでいただいています。

商工会議所や市役所との連携

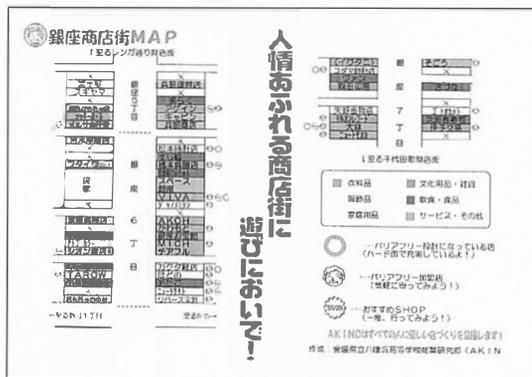
一 商工会議所主催のショッピングモビリティ事業への協力

バリアフリーの意識啓発活動として「バリアフリー・シール」「バリアフリー版・商店街MAP」を作成し、御協力・御理解をいただける商店の店頭にしールを貼らせていただいたり、MAPは公共機関に置かせていただき、多数の方に利用していただいています。MAPには商店街周辺の駐車場やトイレ、公衆電話などの場所も調査し掲載しています。

二 市役所からのバリアフリーマップ作成依頼

右記の「商店街MAP」を市内中心市街地に広げたもので「バリアフリー版・てやてやMAP」と名付け、作成しまし

た。これも市役所や駅、病院などに配布され、利用していただいています。



バリアフリー版 商店街MAP

今後の取り組み

現在、商業研究部では「商店街活性化」のテーマのもと「商店街との連携」「みんなの商店街」の研究・実践を続けています。高校生の取り組みに温かいご支援をいただきますようお願いいたします。

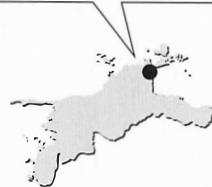
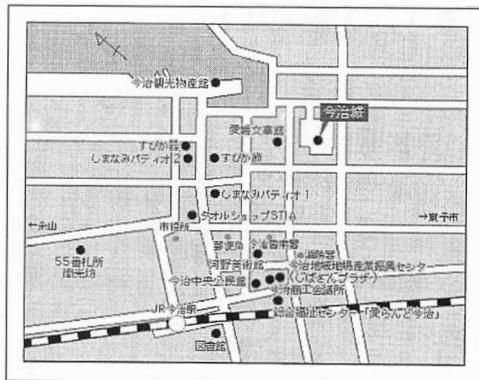
商業研究部 平成十三年度研究発表報告書から
「人と人との心のふれあいが、商店街で行なわれることこそが本当の意味での活性化だ」

「Heart to Heart」

『まちの賑わい』



今治市
チーム・カオス
ト部 秀彦



かつての今治の魅力

あさつての日曜日、今治へ行く。この親の一言でその日からそわそわ、土曜日の晩はなかなか寝付けなかった。

これは芸予諸島にある伯方町に生まれ育った四十歳代の男性の小学校時代の回想です。当日は早起きし、フェリーや渡海船に乗り今治の内港へ到着、まず親の買い物する店へ。午前中に用事を済ませると昼は「かねと食堂」でかつお出汁の効いた「おうどん」を食べて、その後「太洋デパート」や商店街でウインドーショッピング。時には映画館へも。こうして少年の心騒ぐ一日があつたという間に過ぎていったそうです。

当時、そうして島しょ部から来る人々に限らず、玉川、朝倉、波方、大西、あるいは東予市などの人たちにとっても、今治の港周辺から広がっている本町、常盤町の商店街へ買い物に行くことは大きな意味のある非日常でした。当時の「街のにぎわい」は、そうした人々が往來することと密接に関係していたようです。

今治市の中心部は、既に十八世紀初頭から商業的にかなり繁栄し始めていたらしく、十九世紀後半の江戸末期には、松山藩の実高一石あたりの人口が約一・三



シャッターの目立つ平日の本町2～3丁目

四人であつたのに対し、今治藩は一・七四人とかなり多くなっています。その差は、小さいながらも島しょ部や中国筋や京都・大阪と直結する海運路を持つ港が今治城下の直ぐ側に存在し、人々の往來が今予想する以上に頻繁で、非農業人口の割合が大きかったであろうと想像されることに深く関係しているように思います。

今治城から北へ広がり、寺町まで並行して伸びている八つの街路は、十七世紀初頭に城下町が築かれた時からある街で、築城時の港であつた「舟入」に注ぐ金星川河口近くの川岸端（カシバタ）と呼ばれる辺りや、呉服屋や小間物問屋等が立ち並ぶ本町、生鮮食品などが売られていた

まちの賑わい

北新町や風早町、米屋町など、この地域には人々が集住し、また今治藩の領域を越えて様々な人々が日常的に往来していたようです。

現在、中心地には江戸期からの南北に伸びる街並みに加え、東西に広がる近代的な道路が造られ、今治城を中心として東西南北に格子状に広がる街路が形成されています。大都市からの訪問者たちの目には、整然として落ち着いた素敵な街並みに映るようです。しかしそこで生まれ育った者としては、その落ち着いた見かけは、古くから時間をかけて形成されてきた内港を中心に広がる街路が、いまや中心市街地空洞化の見本のような状態になってきていることと密接に結びついている様に思えるので、喜んでよいやら悪いやら複雑な気持ちになります。

賑わいが過去のものに

今や、郊外への人口拡散と大型ショッピング店の開店、大橋開通による「みなと」機能の喪失などにより、ほんの十数年前までの賑わいが遙かな過去の事のようにさえ思える時代となってしまいました。近い将来、あの少年の心を騒がせた「にぎわい」がもどってくることはないかも知れません。しかし、四百年の時間

の重みを持つこの市街地の価値はそう簡単にはなくなるものでありませんし、無くしてはいけけないのではないかと考えています。今治地域の人々がその歴史的な根っこを失わないために、この「場」の持つ価値を大切にしたいと思います。

チーム・カオスの挑戦

私たちは、チーム・カオスという名のボランティアグループを結成し、今治城築城以来の街並みを今治地域の中心地として、全く新しい形で再生させようとして活動しています。

駐車場と空き店舗の目立つ街路は、見方を変えればこれから新しい形の街、例えば小粋なお店や、西欧の都市中心部にあるような中低層の高級住宅を連想させながらも、あくまで日本的な町屋風住居などが調和を持って共存し、人々が自信と誇りを持って安定したコミュニティの中で生活し、商いを営み、また周りから人々が非日常の楽しみを求めて訪れる街並み、こうした何処にもないような「不思議な街」を創り出していく格好の空間になると考えています。

たとえば、大学時代の親しい友人が遠方から遙々と訪ねて来たとしまじょう。しまなみ街道の観光案内の後どうしまし

ようか。美味しい瀬戸内の魚料理ですよね。二十万石のお城のお濠(海水)で群遊するチヌ(黒鯛)が尾を水面に跳ね上げながら餌をついばむ姿(現在も見ることが出来ます)に驚き、濠に続くロマンチックな内港の辺りを辿り、海の見えるちょっと気の利いた静謐な街路を、昔話に興じながらブラブラと本町方向へ歩き、好みの割烹へ辿りつく。今治ならばこれが理想であろうと思います。

少年、少女の心を騒がせるものは少ないかもしれないけれども、大人の気持ちと時を過ごすことが出来ること、これもまたこれからの時代に相応しい「街のにぎわい」と表現して良いと思います。

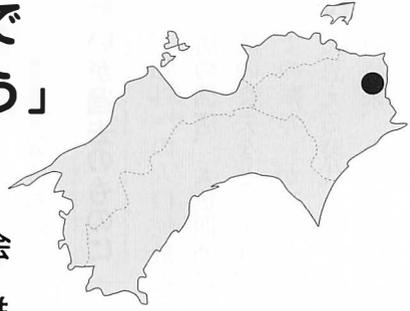


催しものでにぎわう商店街

「まちづくりはみんなで力を合わせよう」



徳島市
NPO 法人 新町川を守る会
理事長 中村 英雄



川を愛する有志が集った

徳島市内には大小百三十八の川が網の目のように流れ、中心部を流れる新町川は昔から町のシンボルとして市民に愛され、藍の輸送には水上交通が利用されていることなどから、川はここに暮らす人々の営みを支え続けてきた仲間であった。そんな川も、昭和三十年代後半からは魚も住めぬどぶ川となり、昭和四十年代中頃からは各種の公害規制により少しずつ元の姿を回復してくるようになってきたが、依然として沢山のゴミは浮遊したまま放置されていた。

そこで、平成二年三月「市民の汚した川は市民の手できれいに再生しよう」と、川を愛する有志十名で「新町川を守る会」を結成し、毎月二回ボート四隻に分乗して網を手に持ち川の清掃を始めることとなった。

活動エリアは、市内中心部を流れる新町川と助任川の通称「ひょうたん島」と呼ばれる円周六kmのエリアだ。活動当初はベッドやバイク、冷蔵庫、扇風機など驚くような物が川に捨てられており、清掃船はすぐに満杯になった。それから約十二年、地道な活動を続けて仲間の数も二百五十人あまりに増えた。

苦楽を楽しむNPO活動

市民と行政とが協働して川を活かした街づくりが本格化したのは、平成四年に徳島市で策定した「ひょうたん島水と緑のネットワーク構想」に基づき購入された九人乗りの電動遊覧船試乗会によって、「ひょうたん島遊覧船試乗会」が開始された頃からである。

当初は隔週日曜日毎に市が一日四回の試乗会を開催していた。開始されてしばらくは、事業のユニークさがマスコミ等で報道され人気を博したが、隔週開催であることなどから定着するまでに至らず、そのうちに試乗希望者の伸びに限界が見



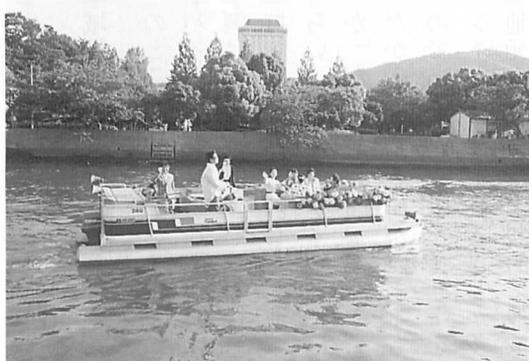
雨の中の川清掃

え始めてきた。

しかしながら、今後この事業が川を生かした街づくりにとって大変重要なものと感じたことから、市に「無償でいいからこの事業をわれわれに任せてくれ。」と申入れた。

めでたく事業は請け負うことになり、毎週、回を重ねる毎に利用者も増え、リピートして来られる方々とも顔なじみとなり、こちらとしても大勢の参加者との交流が楽しみとなり、試乗を終えて満足して喜んでもらった顔が増えて来たが、たがって、この事業に確かな手応えを感じるようになってきた。

試乗会の評判がだんだんと高まるにし



ひょうたん島クルージング

たがって、バッテリー船ひょうたん号だけでは多数の乗船希望者をさばくことは出来なくなってきた。そこで、会で一念発起し、新たに十四人乗りの中型艇を独自で購入することとなり、事業の名称も「ひょうたん島周遊船事業」と変更。また多くの自主事業として、事業を本格化させていくこととなった。

乗船は無料で、開催日は毎週土曜日と日曜日に一日平均五〜六周程度の運航を決めた。燃料費として一日約三千元、そのうえ新たに操縦者と、ガイド二人を常時確保したうえでローテーションさせていかなければならず、しかもボランティア活動といえども始めた限りはこちらの都合で休止することもできず、事業の拡大は不安いっぱいの決断であった。

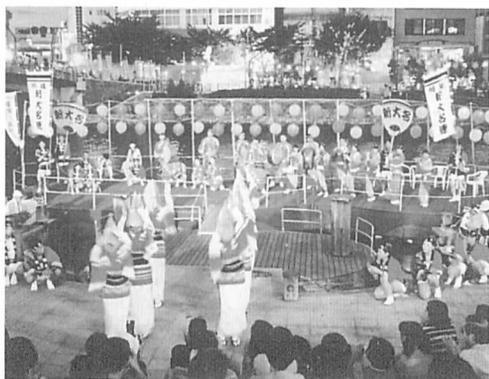
幸い、運転業務を受け持つための船舶免許取得には、県の職員でもある会員が名乗り出てくれ、現在、この周遊船事業は毎年四月から十一月までの間、毎日五回の定期運航と、毎年お盆に開催される阿波踊り期間中や、NPOで育成・管理する川沿いの花壇(約二百五十m)に咲く頃の特別運航を実施している。

これらの事業を継続的に取り組んでいくことは、プライベートな時間を犠牲にして無償従事するボランティア活動では

確かに厳しいものがあり、寒い日、暑い日の苦労や、活動費の工面などは、川を生かした街づくりに対する市民の喜びと期待感の高まりなどが引き替えてなければ到底持続できていけないものである。

みんなが力を合わせよう

街づくりは、百年の夢。子供の頃に夢に描いた素敵な街を実現していくために、できる範囲でチョビットずつみんなで力を合わせあうことだ。つまり「一人の百歩より百人の一步」ということ。市民や行政だけではなく、企業もできる範囲で協働しやすくなる、そんなシステムを本格的に議論する時期であろう。



「よしこの」が水面に響く新町橋東公園

引き算型まちづくりの事始め (三)

地域振興は観光で？

このところ観光振興をテーマにして、アドバイザーとしての地域振興にかかわる事例は少なくない。そして行った先々では打ち出の小槌よろしく、地域をみせてもらい、「何かよいアイデアはありますか」が最初の質問。一度や二度足を運んだからといって何ができるものでもないのであるが、アドバイザーをコンサルタントと間違えられることが多い。確かに地元の人よりは客観的に地域がみえることはあるかもしれないが、あつたとしてもそのことを地域に提示したところで、説明がまずいのか容易には理解を示してはもらえない。どうも本当に助言を求めている人たちが参加できず、タテマエとして肩書き組で会議のメンバーが編成されている感がしてならない。

訪問して最初に面会する人たちといえは町長、議長、管理職の面々、そして○会長と称する住民団体の代表者の場合が圧倒的に多い。こうした肩書きを有する人たちと二言、三言話を進めて感じるのは、地域振興をタテマエで考えようとする姿勢がありありで、出てくる言葉は「行政が何をすべきか」といった論調に終始してしまふ。ただし、真剣に、本音

で地域のことに苦慮されている人がいることに会おうときの喜びは別格ではあるが。その地に長年住んでいて試行錯誤を繰り返して、そしてうまくいかないものを、よそ者がメニューを変えて再び提案されても仕方がないといった思いからだろう。何を言っても話題の共通性がみえてこない。

多くの町や村で基幹産業であった農林業など一次産業が駄目になり、住民の就業の場を求めて山を削り、畑や田圃を埋め立てて工場を誘致した。そして一極集中は大都会ばかりではない。村人は競うように離農し、サラリーマンへと就業構造に大きい変化が生じた。同時に街に造られたマンション暮らしを求めて若い住民が移動し、山村集落から若者がいなくなった。スパイラルという言葉が毎日のように新聞、テレビを飾っているが、悪循環は山間地域にはとつづく昔から起こっており、珍しいことではなかった。行政としてこうした地域の現状から脱皮したいと、地域振興の目玉に出現したのが観光振興かも知れない。

昔「デモシカ観光」とかいう言葉を耳にしたことを思い出す。地域の活性化のためにはもはや観光シカない、観光デモやってみるかといった時に使われるらし

いが、観光とはそれほど生やさしいものではない。にもかかわらず地域を観光して人が動けば金が動き、地域が活性化すると信じる人が少なくないだけに期待が大きいのであるが……。こうした状況はバブルの時代にその頂点を迎え、ふるさと創生事業と重なって実に多くの箱モノが生まれた。その多くは行政主導で企画され、事業化される。夢のような壮大なビジョンのもと、うまくいけばバンバンザイであるが、しくじった事例もまた少なくない。そろそろ観光の難しさ、観光の担い手を真剣に考えたいものである。

政治はタブー？

引き算型まちづくりをもつたいぶつて論じるつもりはないが、世の中の価値観がカネを中心にここまで固定化し、墮落している姿は嘆かわしい。狂牛病からはじまり外務省、雪印乳業など世の中ありとあらゆるところでカネにまつわる不正の積み上げが罷り通り、前々号で触れたように社会正義のかけらもみられない社会の中で、公僕として従事している自治体職員とは何なのか。こうした不正の数々を見聞しながら中央ばかりを非難し、それで終わらせている地域社会の有り様に手を拱いている住民の姿は一体どこか

ら来ているのか。中央ばかりを誹謗しても地域は良くならないが、誹謗されなければならぬ中央に依存することでは地域が経営できない世の中の仕組みについて語る場はない。

今年一月十九日の新聞に、大江健三郎氏が東北のある高等学校での講演要請を辞退されたということが報道されていたことを読まれた方がいるだろう。この要請は学校創立百周年記念事業として企画され、快諾されたものであったらしいが、こともあろうに事後になって大江氏に対し、「政治に関して話さないように」との学校長のクレームが辞退の要因になったと報じられていた。そして大江氏のコメントが掲載されていた。「それは政治的に中立をとるより、自分たちの方針とちがうことは話すな、というものだ。いつも自由に話をしてきたものとして、私から講演を辞退した。」と報じられている。

私たちが企画する数々のこうした事業の中にはよくある話かも知れない。このことで私たちが学びたいことは、地域で取り組まれる生涯学習などの講演会が意図するコンセプトである。それは大江氏を持つ社会への見方や考え方を学ぶことが目的ではなく、もしかするとノーベル文学賞受賞者というブランドでもって講

演会を成功裡に終わらせたい思いで企画されたとすれば、主催者の企画そのものに問題があるだろう。講師が選定される場合、それは参加が予定される聴講者のリクエストからではなく、事務局案として「人気という視点」での人集めが基準になる、そして集まった数で成功失敗といった評価がされてしまう。シンポジウムなどでは、動員は事務局にとって不可欠の事務にもなる。

このような体質は公民館など社会教育所管で主催される生涯学習の中で考えられることがおおいが、こうしたことに気付くこともなく、毎年同じ企画で予算が組まれ、担当者が交替しても事業が継続される。何時の場合も事業消化が主たる目的になる事例は少なくない。そして、「なぜという疑問」が浮かばないところには改革は見えてこないし、引き算型の街づくりもまた進まない。ことに共通されそうである。

この報道事例を通してさらに深めて考えたいことは、「政治に関して話さないように」との注文が簡単に提起される体質である。ことにまちづくりや過疎化、高齢化社会など様々な地域課題の追求に政治は不可欠のものでありながら、特に山間地域へ行けば行くほど政治の話はタブー視されてしまう。所によっては茶飲

み話すら許されない。引き算型の要因として考えるべきことには地方議会のあり方や、議会を構成する議員の体質、行政組織のことについてまで考えなければならぬときに、これらをタブー視しているのは、やはり仲良しクラブのまちづくりごっこに終わってしまっているのではないかと。正しいことを言っても疎んじられるのは、中央のスクランダルな報道のときばかりではない。地方のむら社会にも同様の意識が働いている。言いたいことはあっても「好き好んで悪者にはなりたくない」とする風潮は止みそうにもない。

地域社会が持つこうした体制的な考え方の中では、事なかれ主義よろしく現実を目を向けさせない元気の無さが気になって仕方がない。住民や行政に本物の元気がないにもかかわらず、元気そうな素振りでもちづくりを論じるところに、人も組織も価値観までものタテマエが存在していると考えるのは私一人であろうか。引き算型まちづくりの基本は、時として同僚が嫌がる、仲間が嫌がる、そして地域社会から後ろ指を指される様な事象に対して、「逃げる」という負の要因を取り除く勇氣として考えたいかがであるろう。

内子町 岡田 文淑

まちづくりの方法論

—ローカルな共同実践のフィールドワーク

日本・環境文化研究所

河原 利和



目次

はじめに

私は、主に中山間地域や過疎地域、地方中小都市などのまちづくりに携わる地域プランナー（企画・計画の立案者）である。本稿では、私が深く関与している鳥取県智頭町ちづちょうなどのフィールドに密着しながら試みている、地域計画学と社会（心理）学をまたぐ視点のローカルな共同実践（以下、共同実践）の方法論について紹介してみよう。

承

ローカルな共同実践

共同実践については、杉万俊夫京都大学教授が提唱する「人間科学」（自然科学に対するもう一つの科学）の考え方を前提にしている。その考え方を要約する。

「人間科学は、共同実践の科学である。研究者（コンサルタントなど専門家を含め）とフィールドの人々（住民、民間、行政などを含め）は、共同実践を行う。したがって、フィールドの人々は、単なる研究（観察）対象者ではなく、当事者と呼ぶ。人間科学は、研究者と当事者による共同実践として進行する。人間科学の知識である。共同実践は、特

定の時期（時代）に、特定の場所で、特定の人々によって行われる。もちろん時期の長い短い、場所の広い狭い、人々の多い少ないはさまざまである。しかし、そのような違いはあっても、共同実践は、限定された時期と場所における限定された人々によって行われる。人間科学の知識は、基本的に限定された時期と場所における限定された人々による共同実践。つまり、ローカル（局所的）な共同実践の中から生まれる。」

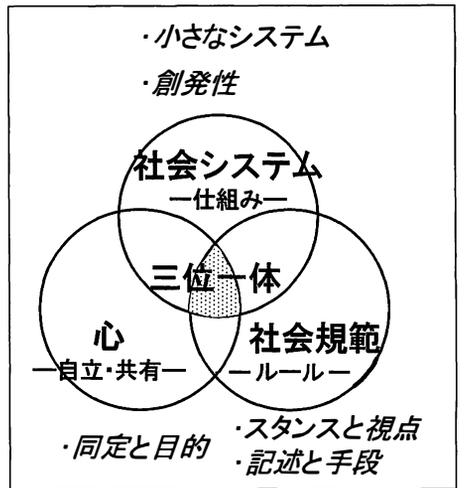
転

ローカルな共同実践の方法論

共同実践の方法論には、次のような五本の柱の考え方が構築できる。なお、紙幅の都合で事例の説明は他の機会に譲る。

(1) 同定と目的…共同実践は、当事者と研究者の間に一線を引き分離することはできなく、研究者と当事者の相互作用の行為である。もちろん研究者は実践の渦の中に身を置きながらコミットする。さらに当事者と研究者は、前提として互いに共同実践が出来るか出来ないか見分ける（同定する）ことが不可欠である。それには必ず目的・目標や価値観を共有し、かつ前提にしている。

(2) スタンスと視点…共同実践では、当事者と研究者のスタンスは、フィール



ドにどっぶりつかからないためにその外に立つ。共同実践は、その結果フィードを変化させる。その変貌した現場に飲み込まれ、現場から排斥されるかもしれないという危険を抱えながら関わっている。さらに両者は、内部者と外部者の複眼的視点を持つてることが不可欠である。それによって、研究者は当事者を介して研究者自身が見えることもあり、もちろんその逆もある。

(3) **小さなシステム**・システムの変革は、小さな種を見つけることから始まる。共同実践の中で生み出される小さなシステムは、フィールド全体を瞬時に把握して、最初から完璧な間違い無いシステムを作るのではなく、小さな過ちを重ね、ある段階ごとにバージョンアップさせる、

小さなシステムを作ることが不可欠である。小さなシステムは、小さな循環から大きな循環につながることで、やわらかな全体システムが生まれる。そして、それが個別の小さなシステムに影響を及ぼして、小さなシステムがバージョンアップされ、好循環と好連鎖に結びつけることが重要である。

(4) **創発性**・共同実践によって、創発性が生成される。創発性の時間は、「現在から過去」を理解するのではなく、「現在から未来」を理解するものでなければならぬ。さらに創発性では、当事者が活動の現状の詳細や過去から現在までの経緯をとらえた課題を抱えながらも、試行錯誤を繰り返し継続して、新しい事物が生成される活動の連続である。そして創発性の核心は予想外のことが起こることである。

(5) **記述と手段**・共同実践では、当事者と研究者が個別の活動を特定し、密着して現在進行形で記述する手段を提供する。それには両者が共有化するためのわかりやすい記述（言葉だけでなく、イラストやメディアなどを含め）でとらえることが不可欠である。特に研究者が両者の共同メッセージを概念化や理論化する記述では、フィールドの人々にもわか

りやすくすることによって、共同メッセージが共有化できる。そして共同メッセージを発信することで、他地域の共同実践の人々への伝播力を持たせることが重要である。

結 おわりに

次のようなまちづくりキーワードによって、五本の柱の考え方を組み立てることが出来る。同定と目的は、両者一人ひとりの自立・共有ともいえる「心」。スタンスと視点、記述と手段は、両者一人ひとりのルールともいえる「社会規範」。小さなシステム、創発性は、共同実践の仕組みともいえる「社会システム」である。最後に、まず「心」が前提で、それを根底に据えて「社会規範」が形成される。そして「心」「社会規範」が基になって、「社会システム」が構築される。すなわち、まちづくりの方法論では「心」「社会規範」「社会システム」が一つでも欠けたら成り立たず、それが三位一体の関係になっていることが大切である。

昨年七月から始まった愛媛県全体の近代化遺産等総合調査（一次調査）が、二月二十八日に終了しました。岡崎主任以下五名のスタッフが二チームにわかれ、私は東予と中予地方の三十五市町村を回りました。愛媛県の半分しか回っていませんが、愛媛って広いと実感しました。

交通手段は車と船です。中島町、弓削町、生名村、岩城村、魚島村、関前村へは船で行きました。今治市沖の小島、北

方面へと行き来していた様子が想像できました。瀬戸内海の安全を守るためにつくられた明治時代の灯台やレンガ造りの官舎もありました。官舎は平屋、瓦屋根で、小さい建物ですがバランスがよく、絵になる建物でした。

山々に囲まれた、久万町、面河村、美川村、柳谷村、小田町へは、道路が整備されているので、松山から車を使って一時間以内で着きます。昭和始めにコンク

近代化遺産等総合調査の

一次調査を終えて

元調査員

越智 恵里



条市の安居島へも船を使いました。初めて乗った路線でしたが、時間は一時間位で次の港に着くので、考えていたよりも近く、また船って便利だと感じました。島々では、昭和初期につくられた石灰積み出し港跡やたばこ乾燥庫、塩の専売公社の事務所だった建物などを調査しました。調査のため海の上を何回も行き来している、昔の人が、島から石灰や塩などを運ぶために、小さな船で関西や広島

リートでつくられた水力発電所の各施設の中には、今も補修されながら使われている施設がいくつかありました。交通も不便で、今のような重機がなかった時代に、よくつくることができたなあと思、改めて一つ一つの施設が貴重なものになりました。川内町を調査している時に、面河村の建物の話が出てきました。話によると面河村の人が川内町にお嫁にくるといった人の交流があるそうです。川内

町と面河村が近く感じました。

「近代化遺産」の調査対象は、明治、大正、昭和初期につくられた近代化の特徴のある建造物です。学校の校舎とか郵便局、病院などは、当時のまちの中心地にあつたため、今でも、車で行きやすいところにあります。しかし、砂防ダム、鉱山跡、軍事施設跡は、なかなかサバイバルな調査でした。山奥まで探しいつたり、道なき道を歩き回ったりしたので、余計に愛媛を広く感じたのかもしれませんが、おかげさに言ってしまうのですが、道に迷ったのはほんの一、二回です。ほとんど地域の協力者や役場の方々に案内していただき、安全に調査することが出来ました。

所有者の方々、地域の方々のおかげで、愛媛県全体で千件を超える建造物を調査することができました。お世話になった方々、本当にありがとうございます。この調査を通して、その土地その土地の人とお話したこと、美しい建築技術を見たことが自分の財産になりました。また何気なく通っていた自分の町の建物が、いつ建てられたかを知ると、同じ時代の有名な人との関係を考えたりするようになりました。今回の調査が、多くの人の役に立つてくれることを期待します。

ボランティア団体「はーと・ねっと・くらぶ」の田中と申します。この団体では小三から中三までの障害児と健常児、そして学生ボランティアがキャンプ場で三泊四日の自炊生活を通じた協働作業、共同生活を行う中で「自らの気づき」に基づく「相互理解・相互扶助の精神育成」を目的とする「あいあいキャンプ」を行っています。

あいあいキャンプ

はーと・ねっと・くらぶ

田中 啓文



にも手をつないで面倒を見てあげ、「オレがいなくていいのは何もできない。」とか偉そうに言っていたり、車椅子の子を見て見ぬ振りをしていた健常児が、学生ボランティアがいなくてとき照れくさそうに押してあげていたりする姿はほほえましいものです。また、生まれて一度もしゃべった事のない自閉症児が雪解け水に入った瞬間「つめたい」と言い、後日

様です。

自らが気づくことからしか成長は起こりえないのだなあと今更の事のように思っています。

このような体験、経験をキャンプ場のある地域の方々、ボランティア団体、行政、教育委員会、民間企業の方々と一緒に作っていけるキャンプを今年も目指します。

昨年は、地元の高齢者の方々による「キャンプファイヤーでの盆踊り」「就寝前の昔話の朗読」「キャンプファイヤーでの剣の舞」をボランティア参加でやってもらいました。高齢者の方々にも誰にもステキな価値があるということを、体験を通してみんなで交換しあえる環境としてご理解いただければ幸いです。

随時学生ボランティア、助成企業、受け入れていただける市町村を募集しております。興味を持っていただければ幸いです。いつでもお問い合わせください。よろしくお願ひします。

問い合わせ先

田中 啓文

TEL 〇八九一九二一一五五七

E-mail info@aoabaland.com

親元を離れた青少年が中心となった生活の中で、自主性・自発性を発揮しなければ食事もままならない環境の中から役割を決め、助け合いながら営んでいく三泊四日は限りなく遙かな人生の縮図の如く、彼らの心の中に何かを残していつていようです。

はじめは知的障害者を（その概念もない）バカにしていた健常児が、誰に言われるまでもなく三日目にはどこに行くの

それを聞いた両親が「しゃべれる、言葉を理解できるんだ」と喜んだ姿はこちらまでジーンとするほどでした。

また、今まで扶養家族として甘えていた学生が、いきなり子ども（障害を持った子どもも含む）の親代わりを務める中から、自らに魅力がなければ子ども達の心をひきつける事すら出来ない等々で悩みながらも行動していくことで様々な変化が起こってきます。これは子どもも同

“MY TOWN” うおっちゃんく

歩キ目デス & 足ラテス

第19弾

近代化遺産シリーズ

「学校建築②」



岡崎 直司

前回に続いて学校建築を追ってみよう。西条市に大正期の講堂が残っている。県立西条農業学校である。大正八年に創立し、その講堂はその翌年六月に竣工している(写真①)。寄せ棟瓦葺き屋根、ドイツ下見と呼ばれる板張りの外壁に広くガラス窓を配し、当時のモダニズムがよく表現されている。足元に目をやると、レンガ積み基礎であることや、何よりも外回りを淡いピンク色のペンキ塗り仕立てにした事で、無骨な講堂のイメージを随分和らげ、むしろ可愛らしくしている。現代ではどこか閉塞感のある農業だが、当時は希望に満ちた明るい業種であったことが、この建物からもよく伝わっている。今も、西条農業高等学校

の第二体育館として大切に活用されていることが、より嬉しい。

国道三十三号線を南下、美川村へ上がってみる。美川西小学校の木造校舎が素晴らしい(写真②)。かつて、弘形第一尋常小学校として、昭和二年四月に建てられたものだ。印象的なのは、何と云っても正面に突き出た円形バルコニー。山間に突如出現したハイカラな校舎に、当時の子どもたちがどれだけ喜んだことだろう。総二階建てで、中央のバルコニーから両翼への広がりも実にいいスケール感。きつと今の何倍も多くの子供たちが通っていたのだろう。この校舎のもう一つ、お勤めのビューアングルをお教えしよう。裏手に回り、緩傾斜ぞいの道から茶畑越しに眺める。山里の木造校舎がそこにあること、それ自体が何物にも替え難い教育的効果に思える。が、しかし、今春で姿を消す。残念至極。

双海町へ行ってみよう。夕やけ小やけラインを上灘でそれ、少し山の方へ入った谷あいに素敵な校舎が建っている。町立翠(みどり)小学校である(写真③)。こちらは、旧上灘第二尋常小学校として、昭和六年に建てられた。総二階建てで、中央の出っ張ったところの二階部分が校長室。運動場で遊ぶ子どもたちに声の届く距離感



現翠小学校



現美川西小学校



旧西条農業学校



新田仲太郎氏銅像

⑥



④

本館



⑤

本館内部



⑧

第四教棟



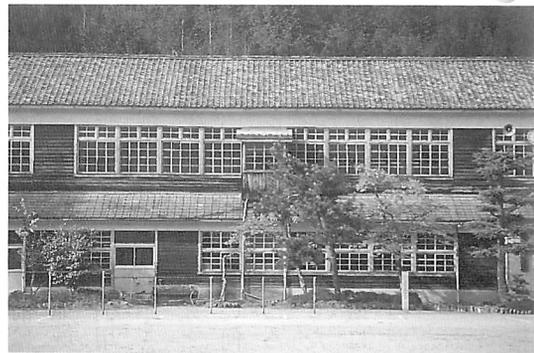
⑦

渡り廊下から講堂を見る

がイイ。これまでに、何度も建て替え話
が起きる度に、地元から保存要望が出さ
れ残った校舎。余程地域に愛されている
のだろう。実際、校舎内には畳敷きの部
屋もあり、地域コミュニティとしても利
用されているようだ。生徒数減の時代性
を考えると、地域活用のあり方として示
唆的である。周囲の急峻な山の背景と赤
い屋根、校名の翠がとも生きている。
私立の学校として唯一残る戦前期の校
舎に、松山市衣山の新田高等学校がある。
この建物(写真④・⑤)は、新田中学校
本館として昭和十五年六月十八日に建て
られた。エピソードがある。内外汽船株
式会社という船会社を経営する新田仲太
郎氏(写真⑥)は、当時の古川県知事か
ら、新中学校設立を懇請される。官の財

政難の折りから、ここは一つ地域のため
に船を一杯分だけ、陸に上げてもらえな
いだろうか、という口説き文句であつた
らしい。かくして新生新田中学校は創立
され、順次今に残る講堂(同十七年・写
真⑦)、第四教棟(同十九年・写真⑧)
などが整備されていった。この本館は、
平成四年にたちばな館という創立記念館
として校内に移転保存されたもので、少
し長さを縮小している。正面の縦線を強
調した有り様や、磁器タイルの使われ方
など、かのフランク・ロイド・ライト調
の傾向も見られ、時代の風を感じる事が
出来る。昭和の時代でまだ自由な空気が
流れていたのは、この頃くらいまでだつ
たのかも知れない。講堂などは、今年の
芸予地震でかなり痛み改築される計画ら

しいので、見納めになるとのこと。
しかし、こうした官民の学校建築の風
景は、何れも地域の時代をそれぞれに伝
え、ただの古い建築物である以上の何か
を我々に物語ってくれる貴重な文化遺産
である。



戦後建築(昭和22年)だが威風堂々だった
久万町の元父二峰中学校(昨春おしくも解
体)

随想

～いい地域に向けて～

前研究員 森田 浩二

(津島町)

今、我々は明治維新、戦後と並び称される激動の転換期を生きているらしい。今までの尺度、価値観が全く通じず、昨日“いい”と思われていたことが今日“よくない”ことになり、これで間違いないと思われてきたことに疑問符がつく時代。お上からみんなに、それも一度に「右向け右」といった号令は、もうないはずだ。本当の「個」の時代がやってきたようだ。群れることでしか力を出せない時代でもないということか。だとすると、今こそ自分の力が暴かれるし、試される。「地域の力」が試されている。生きようとしていない地域、覇気のない地域は淘汰される。自治体職員だって淘汰される。当然といえば、当然。もう少し早くそうならなかったこと自体不思議かも。でもそれに早くから気付き、そこに向かって着々と準備をすすめている人、地域、自治体はたくさんある。それを見て、私自身は？わが地域は？わがまちは？これからか・。

二年間という短くもない、学びのきっかけの時間を過ごした。時代が、世の中が過激に変っているんだということすら気付かずに、いや気付かない振りをして過ごしてきた。誰かがやってくれるんじゃないか。声をかけられれば乗ってもいいが、まだ自分の出番じゃない。そう過ごした時間のなんともつたいないことか。後悔しても始まらないが、反省はしよう。そんなことを思つて、自責の念に駆られる「まちづくりセンター」での二年間だった。今感じることは、まず「危機感」。地域へ危機感もあるが、それより自分自身への。沈んでいるわけではない。かすかに希望が見えてきた。それが「自分への期待感」。

今は少し急を要する時だ。ゆっくりと自分のペースでといった余裕はない気がする。ちょっとだけ急ごうか。わけの分からぬグロバル化と呼ばれるアメリカナイズされた感覚に飲み込まれてしまわないうちに、自分たちの誇りや自信を取り戻しておかなければ。集落が無残になくなる前に、ここに住みたいと思う人がしかたなく去ってしまう前に、少しでもいい地域になろう。いい地域とは、水俣市の吉本哲郎さんがよく引用される湯布院の時松辰夫さんの言葉を借りると「いい地域とは、自然と生産と暮らしがつながっていて、常に新しい何かを創り出すちからをもっているところ」だ。みんないつもそんな地域になりたいと思つている。でも急にそんな地域にはなれない。三十年か、四十年か、いや百年か。でもまず一歩しか進めない。

その為にできそうなことが少し分かった。最初に―しかしこれが一番難しいことだが―自分自身が少しでも変ること。

地元で生きる覚悟はできた。過疎という言葉の呪縛からは解かれた。高齢化もなんだか少し受け入れられそうな気もする。守るべきものや変えてはいけないものも少し見えてきた。食べ物の大切さも痛感した。「スローフード」という言葉さえ登場したという。せめて自分の食べる物は自分たちでつくろう。安く手に入るからそっちがいいとは思わなくなった。できれば買ってもらえる農作物も少し作ろうか。「足るを知る」生活に切り替えるければ。何よりすぐにでも地球に負荷を与えない暮らし方をしないと未来はないことがはつきりしてきた。それを一人ひとりのモラルに期待するしかない時期はもう過ぎたことも。土地や自然はもつといるんな使い方があるという話も伺った。都市での生活の便利さも分かってるが、限界も見えてきた。子供を育てる環境は、山や川のある田舎のほうがいいんじゃないかとみんなが思い始めた。これまでの学歴・偏差値主義の子供の育て方はひずみが大きいと気が付いた。学校のあり方も考えてみよう。学校と地域の関係も話し合おう。教室式の授業や校舎

もこれでいいのか考えよう。でも学びの場はいたるところに必要なことは承知だ。お年寄りも手厚く保護することだけでは

なく、できる範囲で、いわば死ぬまで「あて」にされるほうがいいんじゃないかと思えてきた。老人福祉の名のもとに今まで社会全体で保障してきたが、すべてをかまう余裕もなくなるだろうし。子供たちやお年寄りが、知恵だけといわず、力も出せるように工夫しよう。道具や技も知ろう。自分たちで作れるものは作ってみよう。使い捨てるより、長く使う方が美しいと感じ始めた。川や道の工事の仕方、住むところの姿・形にもこだわろう。少ない現金でもちよつと我慢すれば、心豊かに生きられそうな気もする。すべて大きいことがいいことでもない。もう少しお金を地域内で回せるシステムも教えてもらおう。地域通貨も勉強しよう。とりあえず気兼ねなくみんなが集れる場所もつくらなくては。

これからは日本でも、そこで生まれたから、土地があるから、お墓があるからといって、そこで生きていかなければならないと考える人も少なくなってくるだろう。住む場所・生きる場所を自由に、気軽に選択できる時代がくる。そのために農地や宅地に対する考え方や、それに

関する法律・規制も変っていくだろう。そんな時、みんなに選ばれる地域になつていたらいいな。

たくさん学んだ。「地域づくり」と軽々しく言えないくらい。でも始めよう。なんでもいい。しなくちゃいけないところから。やれるところから。できればみんなにそのきっかけを作れる人になりたい。でもひとりでは無理だから仲間がほしい。言葉が通じるのが仲間だ。

地域づくりの方法、手法は確かに変わった。一人の強いリーダーのみでは全てが動きにくくなった。でも、いわれつづけている地域づくりの本質は決して変わらない。方向も変つてない。地域づくりとは何時も「いい地域を創ろうとする、終わることのない運動」のはずだから。



自分づくりはまだまだこれから

前研究員 三好 誠子

(三瓶町)

二年の間に多くの先進地へ出向き、優れた多くの事例に出会い、熱い人たちにお会いした。

それは必ずしも県外の方ばかりでなく、県内でも各地で地域に愛着を持ちながら活動している人がいた。

研修が終わろうとする今、その人たちの言葉がよみがえってくる。「同じことを持続させることも大切だが、時代や會員ニーズの変化に応じたものを見極めることが大切」と話す地域づくり団体の事務局の方、「かつこ良くなければ女性塾ではない」と頑張る女性塾のメンバー、「地域の可能性を信じて活動する」「イベントを立ち上げ、それが成功したがそこで満足せず、幹となる歴史をきちんと知りたいという欲求で勉強を始めた。しかし学ぶだけでなく、それを現代に活かさなければならぬ」と夢を説くグループのリーダーなど、その人たちの言葉には行動に裏打ちされた重みがあった。

ネットワークの構築を至上命令に、センターに来てできるだけ人に会い、地域を巡った。

どこの地にも、地域のことを憂いながらも愛してやまない人たちがいた。少なくとも、会った人はほとんどがそうだった。過疎を嘆きながらも、地元の小学校

から子どもがいなくならないように、宅地造成して若い夫婦を呼び寄せた地域があった。地区外に出た次男三男あるはそれ以外の人に声をかけ、転入させた地域があった。ともに、わずかではあるが児童が増加している。まさしく、地域を思うが故の行動である。

お年寄りの力を引き出している地域がある。「日本は今高齢化率がどんどん上がっている。しんどいことになった、大変だ、と、多くの人が思っている。しかし、今まで努力してきたのは、まさに高齢化率を上げるためだったのではないか。一生懸命医療・福祉・介護の充実に務め、結果高齢化率が上がったと嘆くのはちょっと違うんじゃないですか」と、地域づくり研究会で亀地宏さんがおっしゃっていた。そのとおりだ。せっかく長生きできるようになったのだから、それは楽しいこととしてとらえたい。パンやソーセージ作りで、物産市で、お年寄りの力を引き出し、いきいきと活動している地域を見習いたい。

住民参加のワークショップ研修に参加した。住民主導のまちづくりのために、住民自らが意見を出し合い、事業を行っていく。ワークショップという言葉は良く聞くけれど、ともかく体験すること、

そう思つての参加だった。決めたテーマに沿つてワークショップを組み立てていき、開催し、何らかの成果(物)を得る……という研修を受けた結果、見えてきたものは、主に主催者側の企画力と分析力、伝達力、アピール力の必要性などである。それは一つの事業をする場合、ワークショップが必要か、ということから始まる。これはつまり、行政に携るものに求められる能力でもあろう。これからは、事務処理力だけでなく、地域が必要としている事業に対する企画力、収集した情報の分析力、そして伝える力が必要だ。それがあつてはじめて、事業が確信をもつて実現できてくる。

地元学なる考えも知つた。まず地元を知ろう、そこから全ては始まる、という考え方である。自分の住んでいるところには何もないというけれど、本当にないのか、すごい宝が一杯あるんじゃないかと住民に問い掛けることから始まる。いうところの宝は、いわゆる貨幣価値のある宝ではない。家並みであつたり、畑の作物であつたり、野に咲く花であつたり、そこに暮らす人であつたりする。

しかしそれは地域に長く住んでいる人にはなかなかわかりにくい。外からの目も必要である。ある地域で活躍している

人がいる。聞けば他地域から転入あるいは結婚で入つてきたというのはよく聞かされた。話だ。

地域で必要なものはコミュニティである。コミュニティとは共通の言葉をもつことととらえる、とは、五十崎の亀岡さんの言葉である。自ら関わつた河川保護の話の中で、「みな美しい川を作ろう」というという意見には賛成するが、美しさに対する思いはその人となり、生い立ちによつて違う。そのことを認識し共有する事が大事」だと言われる。同じ言葉で話す、話がわかるまではよもだを言いがらとりとめのめな話をしたとも。それは根回しか、いや違う、議論をするための土壌作りだ。

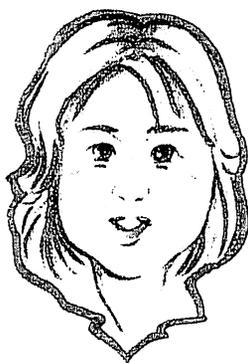
今までの地域も画一的な発展・快適性を求めてきた。そういえば、すぐそばにあるはずの自然に触れることすら難しくなつてきている。気がつけば幼い頃遊んだ磯にはテトラポットが置かれ、護岸はコンクリートで埋め立てられている。

都会的な家に住み、電化製品に囲まれたの生活。夏の暑い日、夕方になると海から吹いてくる涼やかな潮風を取り込むこともなく、部屋を締め切つて冷房を効かせる。どんな小さな町に行つても自動販売機が置かれ、舗装された道路が続い

ている。その町の特徴を見つけること自体難しくなつてきた。自然に対して畏れたり、敬つたりする意識が薄れてきた。人はどこへ行くこうとしているのだろうか。

自分自身をまず見直す、安心できるものをできれば自分で作つて食べる、海を汚さない……センターでの二年間はそういう当たり前のことをもう一度きちんと考えるきっかけ作りとなつた。地域を良くしよう、元気にしよう、こんな大きなことは無論出来るわけがないが、まず自分でできることから始めてみよう。合併云々で周りは騒がしいけれど、そんなときだからこそ、地域を見つめなおしたい。今まで培われてきた風土、生活を勉強しておしてみたい。

センターで知つた多くの方とのネットワークを大切にしながら、地元で生き続けていくためにも。



まち♥塾

昨年一年の活動



今年も、昨年の「みかん塾」に引き続き、県からの委託を受けて地域づくりリーダー育成研修事業を行いました。その成果を報告します。

今年度は東は伊予三島市、南は津島町まで二十一名の塾生でスタート。薬剤師、自営業者、主婦、行政関係者など、今回も多彩な顔ぶれが揃った。研修としては、一泊二日の現地研修を主に計五回行った。現地研修はそれぞれ、県内では岩城村と宇和島市、県外研修として高知県馬路村と赤岡町である。

開講式は六月三十日に行った。研修生はちよつと緊張した面持ちながらも、それぞれ自己紹介を中心に、自分がしている活動の紹介やリーダー研修会への抱負などを発表、一年間の研修がスタートした。

岩城村での研修 九月二十一・二十二日
二回目の研修は岩城村。台風で予定が一月ずれ込み、九月に実施となった。訪れたことがないという人が大半で、知識もあまりなかったが、そこ岩城村では元気に活動している人たちがいた。

積善山に登り、三百六十度の絶景を楽しんだ。すぐ北側には橋の架かった生口島。もう広島県である。岩城の人の経済圏は広島、因島なんだと、目の前にある



岩城村の積善山から見る瀬戸内の島々

光景で実感した。まさに百聞は一見にしかず。

その後、島で元気に活動しておられる女性グループ「日赤奉仕団とその名もユニークな」でべそおばちゃん」の活動事例を聞く。自分達で島の特産品を作ろうと、レモン果汁にバターと砂糖、卵を練りこんで作った『れもんはーと』を商品化、販売しているというでべそおばちゃん達の取り組みを主に聞かせていただいた。

その後、東予市役所職員であり、えひめ地域づくり研究会議事務局長の近藤誠さんをお招きして、「熱湯（ネット）ワークと沸騰（フット）ワーク」についての講演。人と交流し、ネットワークを作る

ことが大事、汗をかくことが大事、そしてなによりフットワークを軽くという話に、改めて人のつながりの大切さを確認した。

夜は、思いがけずでべそおばちゃんのところへ視察に見えていた小笠原の人たちとの交流も持つことができた。

ムーブメント教室

研修生の中にこの「ムーブメント」をされている方がおられたこともあり、体験。ほとんどの人が初めての経験であった。これは、運動療法とも訳され、様々な場面で用いられつつあるものだそうだが、ボールを使ったり、新聞紙を破いたり、大きなテントを使ったりして、みんなの羞恥心や消極性を取り除き、わきあいあいとしたふんいきにしていく。越智さんの巧みな誘導もあり、子どものように嬉々としてゲームを行った。研修会や集会での導入としても、有効な方法と思われた。

県外研修 高知県馬路村・赤岡町

十一月十五・十六日

ごつくん馬路村の取り組み

ただか人口千二百人ほどの小さな村ではあるが、ごつくん馬路村に代表される柚子製品の売上は平成十年二十億円に達した。現在は原料が不足するという事

態になっている。柚子農家はほとんどが六十歳以上の高齢者であり、経営維持に難しさはある。良い商品でも、売る努力をしなければ売れない、などの話を柚子加工工場研究室の北本さんよりお聞きした。「農民のための農協という観点で仕事をしている」という、一見当たり前の言葉が塾生の心に残ったようだった。

その後、今日の馬路村を創ったともいえる東谷常務からこれまでの取り組み、これからの方向をお伺いした。この村にふさわしい方法が通販だった。狭い道だからこそその価値を見出し、何もなくて良かったという発想で物事にあたってきた。持つていって売れることは今までの程度できてきたので、これからは来てもらって売れることに力を入れていきたい。将来生き残るために有機農法も充実させたいなどの話のあと合併問題についての質問には、周辺合併農協からの圧力もあるが、地方の追い風を待つ心境、できればしたくないとの答えだった。

女性が輝いている、赤岡町の取り組み

翌日は、西日本で二番目に小さな面積の赤岡町へ向かった。ここでの取り組みの特色は、なんとといっても女性のパワーである。やつゆ会、絵金歌舞伎伝承会、まちのお宝ホーム残し隊などの活動はどれ



赤岡のまち並みをカルタで紹介していただきながら散策する

も商店街の女性を中心としている。ちょうど二週間後に開かれる「冬の夏祭り」準備に余念のないところをお邪魔して、カルタを使いながらまちの紹介、活動拠点となっている旭湯内での意見交換を通じて交流した。

楽しみながら活動しているものの、商売としてやっていくこと、生活に合わせた活動をしていくことの難しさを感じているとのことだった。

塾生にとっても元気に生き生きと活動している赤岡町の女性たちの活動は大いに刺激になったようだった。

宇和島研修

十二月七・八日

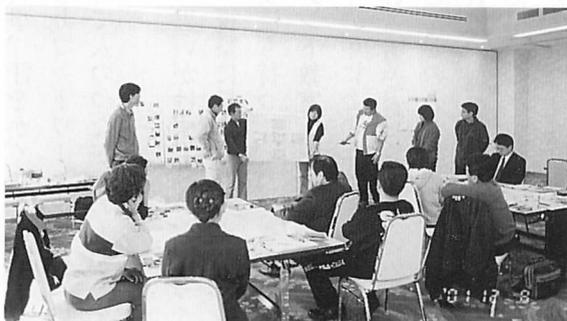
四回目となる現地研修、今回はワーク

ショップの技法を学ぶというテーマで行った。宇和島市遊子漁協の前組合長古谷さんから話を伺った後、話の中にもあった特徴的景観である段々畑を歩き、その精密な仕事に驚嘆した。まさに「百聞は一見にしかず」である。

また、同日、下波地区を宝物を見つけるために3グループに分かれて散策、見つけた宝物を模造紙に落とし込み、翌日、その宝物の有効活用を考え、発表するというところまで行った。

前日の夜には交流会の席上に市長さんもお見えになり、その場で、発見した宝物の図を発表させていただいた。

宇和島でのワークショップの風景



5 回目の研修

最終は当センターで、二月二十六日に行った。まちづくり委員会の委員でもある双海町の若松課長にも参加いただき、いくつかのテーマを絞って、討論した。

塾生の感想としては、「自分の活動に自信が持てた、今まで以上にしっかりと取り組みたい」「研修したことが意見として出せるようになっていきたい」「人前でしゃべれるようになったことが一番の収穫」「公募システムで参加できてよかった」「視野が広がった」などの意見が聞かれた。

なかで、「研修生が研修結果を発表するという形態も良いのでは」という意見も聞かれたので、次年度検討してみたい。年間を通じて塾生の方々の意欲に半ば押されながらの研修で、事務局としても大いに勉強させていただいた。

一年間を通じてお世話になった方々に改めて御礼申し上げますとともに、今後の塾生の皆さんの活躍をお祈りいたします。

地域づくりリーダーの育成を行います

平成14年度の「地域づくりリーダー育成研修会研修生」募集中

ふるさとを愛し、地域に活力を与えることのできる（かもしれない）リーダーの育成を目的とした研修会を平成13年度に引き続き実施します。意欲ある方のご応募をお待ちしています。

研修期間

- 宿泊を伴う研修をなるべく多く取り入れて、効果的な研修を目指します。
- 地域づくり実践者などのアドバイザーを招いたり、現地研修を行ってより実践的な研修にする予定です。

募集人数及び応募資格

- 15人
- 地域課題に主体的に取り組む意欲のある方で、気持ちが青春していれば年齢は問いません。

申込締切

5月15日（水）

問い合わせ・申し込み先 財団法人えひめ地域政策研究センター

あなたたちのまちづくり活動をアシストします

「まちづくり活動アシスト事業」申し込み受付中

自分達が活動している中で、実践者から話を聞きたい

集会やシンポジウムを開催したい

けど、ノウハウや資金がなくて…と悩んでおられるあなた！

まちづくり活動アシスト事業 があります

一度センターにお問い合わせください。

問い合わせ・申し込み先

財団法人えひめ地域政策研究センター

〒790-0003 松山市三番町四丁目10-1 愛媛県三番町ビル2階

TEL 089-932-7750 FAX 089-932-7760

E-mail machicen@mail.netwave.or.jp

～地域文化から総合学習へ～

中・四国環境教育ミーティング02 開催のお知らせ

今回、四国で初めての開催です。

愛媛の文化を紐解くことから、未来に向かった環境教育に焦点を当て、その中から循環型社会のあり方を模索することを主眼に開催されます。

環境教育や環境保全、自然保護などに関心のある方、是非ご参加ください。

と き 6月21日(金)～23日(日)

と ころ 野外活動センター(レインボーハイランド)

問い合わせ先 ODAの木協会

TEL & FAX 0892-52-2026

E-mail odanoki@dream.ocn.ne.jp

2011のちのちのまち

行ってきましたよ♪今回はイタリア!



ドゥオモの上から見たフィレンツェの町

イタリアの感想?温故知新:かな。その精神が今のイタリアの魅力にもつながってるんだなあて実感。そして、百聞は一見にしかず!どんな言葉を並べても、実物を目にした感動に勝るものはないでしょう!私の中でまた新たなページが開いたって感じです。それに食事。やっぱり日本人はイタリアン好き♪ベネチアで食べたイカ墨リゾットなんてもう絶品。もちろんワインも。そしてショッピング!店物も人も洒落でキュー



今回出会った人達(Accadiにて)

トだし:…これで楽しくない人います?
あ、でもストライキで足止めされたし、バールで『値段ごまかそうとしてるでしょ?』みたいな事もありました。でも、この程度なら旅の思い出として受け止められる範囲だったし、何よりイタリア人もユーロへの変換期で少々混乱気味でしたからね!そして今回は素敵な人達との出会いもあったんですよ♪あ、ほんと旅って楽しい!!

大洲まちの駅

『あさもや』

大洲市

大洲の新しい観光の玄関口「大洲まちの駅『あさもや』」が四月十二日にオープンします。

観光や物産等に関する情報の発信基地として、また、市民と来街者との交流の場としてご活用ください。



大洲まちの駅

津島『やすらぎの里』

津島町



地域の方々に「ゆとり」と「やすらぎ」を感じてもらえる「健康と福祉・交流」をテーマとした施設ができました。

四月十四日オープンです。

湯〜ったりの〜んびり熱田の湯でリラックスした後は、名物料理で舌鼓。楽しいひと時をお約束します。



—春は異動の季節です—



平成14年度、えひめ地域政策研究センターまちづくり活動部門は、左記のスタッフで活動します（☆は新しいスタッフです）。

2年間センター研究員として勤務された三好さんは三瓶町役場に、森田さんは津島町役場に帰られました。これからも、客員研究員としてよろしく願っています。

後列左から

研究員 橋岡 勝一 (県農えひめ) ☆池田 大作 (内海村) 主任研究員 山下 大成 (愛媛県) 研究員 ☆奥山 清司 (瀬戸町)

常務・統括部長 ☆脇 安生 (日本政策投資銀行) 専務・所長 三木 秀文 事務員 西村 寛子

印刷／三創印刷株式会社

（財）えひめ地域政策研究センター

発行／平成十四年四月十日

TEL089(932)7750

TEL089(932)7750

FAX089(932)7760

（まちづくりセンターえひめ）

（財）えひめ地域政策研究センター

まちづくり活動部門

松山市三番町四丁目十番地一

愛媛県三番町ビル二階

〒790-0003

編集係までお寄せください。

***内容についての意見やまちづくり活動のトピックなどありましたら、お気軽に『舞たうん』

***内容についての意見やまちづくり活動のトピックなどありましたら、お気軽に『舞たうん』